

私にとって父方の祖父は酒好きで無口で庭の畑でとれた野菜や果物をくれるだけのただのお年寄りというイメージの人です。無口で、他の人の話を聞いているのかも分からない様子で座っている祖父とは一緒に庭のお芋を掘る時くらいしかかかわっていません。むしろ、「じいじとお喋りしてきなさい」と私に義務づけるかのように命令されるので正直めんどうくさいとまで思っていました。外出する時ものろのろと歩いて目的地まで中々到着できませんでした。私も体調がすぐれていなく、具合が悪い日に限って喋りかけてきたりして過去に一度だけ、早く死んでしまえば良いのにとほんの少し感じてしまった事もありました。

そんな祖父は今年の恵泉デー準備期間中に、亡くなりました。少し前から脳内出血で倒れていて意識不明のまま、病院に入院していた祖父は、父や叔母たちの祈りと希望により少しばかり回復の光が見えはじめ、誰もが希望を持った次の瞬間、危篤状態になりました。私が恵泉デー準備を終えて、家に帰り、母に準備の進み具合を報告しようとした時、母から「じいじ、危篤だって」と伝えられました。危篤とは、もういつ死んでしまってもおかしくない状態の事です。私は心臓を殴られた様な衝撃を受けました。必死に祈りました。生死をさまよう祖父を死という暗い穴からロープで引き上げてあげたいような気持ちでした。しかしそんな私の祈りも一ミリも効かなかったかの様に、病院で親族誰一人まにあわないまま、祖父は息をひき取りました。初めに述べた様にそこまで好きではなかった人なのに、とても信じられず悔しくて言葉に言い表せないほどに何処か恐ろしかったです。最近の祖父は父などから強制的にお酒をやめさせられ少し前より笑顔が増えてきた事、そのおかげで最近すごく話しやすくなった事、そして誰よりも私たち親せきを一番見守っていてくれたのは祖父だという事。これらは全て家族の中で私だけが気がついていて、知っていた祖父の本来の中身だと思います。初めに述べた祖父は私が現代っ子ぶってカッコ付けていたせいでフィルターをかけられた祖父であって本来の姿ではありません。葬儀では、私の格好つけていた殻が割れた様に、私は初めから最後までずっと泣いていました。周りがあまり泣いていない時も、泣いていました。涙をとめたくてもどうしても止まりません。どうして動いてくれないのだろう、目を覚ましてくれないのだろう、と遺体を見つめながら悔やし涙が止まりませんでした。よく考えれば私の大好物のさつま芋やみかんやおぞう煮に入れるゆずなどは全て祖父が育ててくれていたものでした。人間は失ってからその物の大切さが理解できるとよく耳にしますが、それを私も身にしみて感じてしまいました。曾祖父が亡くなった時はそんな事など一切感じなかったのは何故でしょうか。それは私が曾祖父を嫌いではなかった事もあるでしょうが、一番は私自身の成長だと思います。祖父が亡くなったと耳にした瞬間のあの心臓を床にたたきつけられた様な苦しみと絶望感や、祖父との最後のお別れである遺体が焼かれてしまう前のもう心臓を抜きとられてしまった様な絶望感と無力さは全て一年前に曾祖父が亡くなった時には感じられなかった感情でありました。身近な人間がこの世から消え去ってしまう事の恐ろしさ、もう二度と会えない無力さは全て、祖父によっておそわったものであります。そして何より、私のムダな殻を破り割ってくれたのは祖父のおかげです。これから身内を亡くし

ていく事は悲しいことですが増え続けるはず。そのたんに、私たち生きている人間は強くなってゆくのだと思います。